

---

# カガミノクニ

律森ちるは

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カガミノクニ

### 【Nコード】

N1770Q

### 【作者名】

律森ちるは

### 【あらすじ】

その力を持つ巫女は、国を動かし、人々を導くとされている。その姿美しく、夜空を閉じ込めた藍の髪は静かに揺れ、月の光を閉じ込めた琥珀の瞳は、未来をも映すだろう。

とある力を持ち生まれながらも、誰からも知られることのない娘と、力を持たず生まれながらも、人々に巫女と祀られる娘の物語。

## 零（前書き）

和風テイストで送る（送りたいと思っている）ファンタジーです。  
多分（多分？）恋愛要素が出てくるお話になる……予定です。

後々残酷な表現も出てくるかと思いますが、宜しくお願い致します。  
執筆はカメの歩みです…。

頑張って書いていこうと思いますので、宜しければ読んでやってください。

## 零

——ただ、其処に居てくれれば他には何も望まないから。

そう彼女は言って、微笑んだ。

さらりと髪を撫ぜるその指はどこまでも優しいのに、凍てついた焰をその瞳に宿していた。

何故、と唇を動かすと、彼女はまた、ただ微笑む。

何故？と鸚鵡返しに、けれど、段々と微笑みが薄れてゆく。

ギシ、と、古い木製の二人を隔てる格子戸が、軋む。彼女の指が食い込んで、爪が白く白く、色を変えた。

お前の所為よ、と微かな、吐息のような言葉が零れた。

それは感情をまるで弓の弦のように絞った、恨みを連なり伴った声音だった。

優しく撫でていた髪をギリリと掴みあげ、痛みを口にする暇も与えず、叫ぶ。

——お前の所為よ。お前が、お前が生まれてきたから。お前が、力を持ったから！

何故、なぜ。そう繰り返す彼女の顔は夜叉のようで。それでも、頬を伝う涙が珠のように零れ落ちる様は、ただ美しく思えた。

彼女は、こんなにも美しいのに、こんなにも心を闇に染めてしまったのか。

ひとしきり言葉を発した後、彼女は荒くなった呼吸を整えるように、静かに顔を俯かせていた。

小さく震えるように動く肩が何処までも細くて、あまりにも頼り

なさげで。しかし、手を伸ばして触れてしまえばまた彼女の逆鱗に触れてしまうのだろう。それだけは、許されない。

落ち着いたのか、彼女は長い髪をさらりと揺らして、顔を上げた。表情は、ない。ただ目の前の存在を映しているだけの、瞳。

彼女の瞳に映っているのは――彼女自身。

否、彼女の鏡像のように映っている、“もう一人の彼女”。

彼女と一つになる筈だった、この世界に生まれ堕ちてはならなかった存在。

この世界で最も、罪深き存在。

お前は、と、彼女が再び微笑む。表情の無かった瞳に、憎しみと切望が宿る。そう、切望、だ。

本当は何よりも彼女自身が、望んでいた力。それを持ち生まれ堕ちた、彼女の合わせ鏡。けして交わることのないふたりという存在への、切なる望み。

ただ、此処に居てくれれば、それでいい、と。

ずっと、私の為だけに生き、私の影となり、私の為に、死になさい、と。

日々繰り返される口癖のような言の葉。

また、来るから。そう紡いだ言葉を最後に、彼女は背を向けた。

ギシ、と軋む板張りの廊下は、暗く冷えた空間に乾いた音を響かせ、消えてゆく。

背中が見えなくなってから、格子戸に彼女がそうしたように指を絡め、ほう、と息をつく。

微かなぬくもりが残っているだろうかと期待をしたが、それは露のように消えた。この冷たい場所で、ぬくもりなど残る筈がないのだ。

どうして、こんなにも冷え切ってしまったのか。

その問いに答える声などある筈もない。ただ、白い息が生まれては儚くとけてゆく。

そうして、また彼女の来訪を待つ。身を縮めて、丸めて、氷のような床板の上に、横たえた。

時が刻まれ、日が昇り、月が沈む。繰り返される日々に、もう体は慣れてしまい、心も、何かを求めることを忘れてしまっていた。

まどろみを覚え、瞼を閉じる。また、一日という日々が、ゆつくりと帳を下して。

『ワタシハ、ココニ、イルヨ』

小さく呟いた娘の声は、虚空に、散る。

## 零（後書き）

修正ハヤ…タイトルなど修正しました（あ

## 壱（前書き）

ありきたりなような…。



## 壺

——嗚呼、はじまりは、何処からだっただろう。

命の国、凜の国、星の国、楼の国、そう呼ばれる四ノ国がこの世界の成り立ちから存在していた。

各国々はそれぞれに国の象徴たる巫女を有し、またそれぞれが、我が国こそが“崩壊の刻”、災厄を逃れ、神国となるという理想を掲げていた。

### “崩壊の刻”

それはまことしやかに囁かれている、この世界の理の一つとされている。

世界が生まれ、人が歩みを成す。立ち上がり、栄華を極め、神々の恵みを忘れし時、訪れる滅びの刻。それが、“崩壊の刻”だと。理、とされているにも拘らず、その破滅的な意味合いから人々からは忌み嫌われている。しかし深く根付いていることも事実で、それ故に国々はこの理を逆手に取り、我こそが災厄を逃れる唯一の国である、と言い競っているのである。

——そんな世界の中、楼の国に祀られている巫女姫、カルタ。彼女の力は、どの国の巫女をも凌駕するであろうと、人々の間より恐

れられ、謳われていた。

朝の空気が、酷く冷え切っていた。ここ最近の寒波とも呼べるその所の為か、随分と屋敷が寒々しく感じる。

屋敷が、と表現するのが正しいのかどうか分からない。正確に言えば、この場所は確かに屋敷の一部だが、隔離されている為である。それも、深く深く、地下に。

此処へと至る道は、暗く長い階段を降りて来るしかない。一日に訪れる人間は、彼女を除けば、ほんの数人しか居ない。

誰かが、この場所を“果の牢獄”と呼んでいたような気がしたが、娘は、此処は“鳥籠”だと思っていた。

羽ばたく事を忘れた、否、羽ばたく事を望まない鳥の、籠。微かに聴こえてくるのは、人ならざるモノの聲だけだった。

……カタン、と。

軋む音に瞼を開くと、其処には何時の間にか、静かに佇む人影があった。美しく華やかな巫女衣装に身を包み、口元には軽く笑みを浮かべた、彼女。

「……お早う、ルカ」

格子戸に白魚のような指を絡ませ、彼女は言った。さらり、と藍の艶やかな長い髪が、流れるように音を立てる。

琥珀色の瞳——この国の人間は、この瞳を月詠ツキヨミの瞳、と呼ぶらしい——に映るのは、同じ顔。

「今日は、何も聴こえなかった？」

「……ん」

こくり、と頷く娘に、巫女衣装を纏った彼女は、「そう」とだけ呟いて、つまらなそうに辺りを見回した。この場所には、彼女の目を愉しませるようなものは何一つ置いてはいない。数瞬で見飽きたらしく、再び瞳が娘を捉えた。

「相変わらず何も言わないのね。つまらない娘」

くすり、と声に出して笑う彼女の声音は、鈴のように可憐だった——そう、可憐でいて、残酷だった。

「ねえ……お前はずっと此処に幽閉されているのに、文句の一つも言わないわね。何故？」

「……その資格が無いと、言われているから」

「ええ……ええ、その通りよ。お前に文句を言う資格はないわ。分かっていないじゃない」

えらいわ、と満足げに格子戸の隙間から絡めていた指を解くと手を伸ばし、そっと、彼女は娘の髪に触れた。ゆっくりと撫でては、くすくすと笑う。

されるがままに、娘は彼女を見つめた。今は穏やかに微笑んでいるこの顔も、何時再び激情に捕われるか分からない。それでも、何も言うことが出来ないのは、彼女こそが絶対の存在であるからだっ

た。

「ねえ、ルカ。聲が聴こえたらすぐに言いなさいね。お前の役目はそれなの。私に聲を伝えることだけが、お前に与えられた存在価値なの」

指先に力が入る。嗚呼、来る、と娘が思った瞬間に、彼女は娘の髪をギリ、と強引に掴みあげた。

「——憎いルカ……お前が生まれなければ、その聲は、その力は、

私のものだったのに！」

痛い、と声を上げることすら、娘には許されていなかった。ただされるがままに、彼女の声を聞く事しか出来ない。引張られた髪も、格子戸に打ちつけた身体も、何一つ抵抗をしてはならない。

楼の国の象徴たる巫女姫、カルタの影となることが、彼女の生きる道なのだ。

「どうしてお前なんか生まれたのよ！ 私と同じ顔、私と同じ声、私と同じ髪、私と同じ瞳！ まったく同じ容姿なのに、どうしてお前が力を持ったのよ！ どうして私じゃなかったのよっ」

ガン、と打ちつけられた身体が軋み、痛みを訴える。それでもルカは、ただの一言も言葉を発しなかった。

静かに、カルタの声を聞いていた。

……頬に摩擦の跡が残る頃、ようやくカルタは落ち着いたようだった。

今度は再び優しくルカの髪を撫ぜると、「また来るから」と微笑んで、カルタは踵を返した。その背中に、ルカは「カルタ——」と小さく声を掛ける。するとカルタは、くると袖を揺らし、にこやかに振り返った。

「なあに？ ルカ」

「また……明日、来て、くれるの？」

ルカのその言葉に、カルタはくすくすと笑って、もちろんよ、と頷いた。

「だってお前のことを一番分かってあげられるのは、私しか、居ないでしょう？」

言い残し去っていくカルタの姿を、ルカはただただ見つめていた。やがて足音も去り、ルカは身体を冷え切った床板の上に丸め、瞼

を閉じた。

＊ ＊ ＊

楼の国では、“先見の巫女姫”を国の象徴たる巫女として祀っていた。

四ノ国の中で最も“災厄”を回避することが出来るであろうと、人々から崇め奉られている、先見の力。それは、未来の事柄を予知する能力のことである。

力を代々受け継ぐ巫女姫の家系は現在に至るまで、脈々とその血に先見の力を宿してきた。衰えることのない力は、国力を増強させ、国に住まう民の心に絶対的な忠誠と希望を与えていた。

他の三ノ国に負けることのない、栄華を極めた国。楼の国はそれを誇っていた。

――だが、一つの異変が起こった。

先代の巫女姫である女性が身籠り、子を産んだ。子は女兒で、同じ顔、同じ姿を持つ、双子の娘だった。

楼の国の先見の家系に生まれる子は、男児であれ女兒であれ巫女姫と呼ばれ、先見の力を有している。たとえそれが他国で吉凶とされる双子であっても、二人に平等に、先見の力は現れていたのである。

だが成長するに伴い、一人の巫女姫に異変が起こった。否、起こったのではなく、起こらなかったと言ったほうが正しいのだろうか。

……数え年五つで開花する先見の力が、現れなかったのである。

「カルタ様、お早う御座います」

「お早う御座います、巫女姫様。本日は桃のお茶葉が入りましたよ」

「そう……後で頂くわ。有難う」

交わされる挨拶に軽く返事を返して、カルタは廊下を歩いていた。些か広すぎるこの屋敷を隅から隅まで移動するのは、随分と疲れる。それでも、十数年もまともに歩いていれば慣れてしまった。角の部屋から、紅の間と呼ばれる部屋まで、カルタは足早に歩を進める。

紅の間には、朝一番にお目に掛かりたいと申し出て来た民を待たせている。民とはいえ、国で一番栄えている都の長だというのだから、それなりの地位のものなのだろう。カルタにはあまり興味はないが。

襖を開けて部屋の中へ入ると、御簾の先に人の気配を感じた。どうやら、先方は待ちかねてたらしい。微かな襖の動きに反応するかのように息をのむ音が聴こえ、次いで深々と頭を下げた。

御簾が音もなく上がり、両者は静かに対面した。

「巫女姫、カルタ様。本日もご機嫌麗しゅう——」

「お早う御座います、長様。お待たせしてしまい誠に申し訳御座いません」

カルタが恭しく首を垂れると、「何を仰いますカルタ様！」と都長は慌てたように頭を振った。<sup>かぶり</sup>まったく以って、立場が上の者に対する態度の手本のような反応である。

カルタは気付かれないように息をつくど、「それで」そう言っただけで微笑んだ。

「はい、本日も神託を賜りに参りました……カルタ様。我々は今日一日、何事もなく過ごせますでしょうか」

都長の言葉に、カルタは「ええ……」と相槌を打つ。「大丈夫ですよ。先見の力は何も告げておりません。心穏やかに過ごせること

でしょう」

「おお、左様で御座いますか！ 有難や、カルタ様……それではわたくしめはこのことを何時も通り民に伝えます故……」

深々と頭を下げた都長に、「本日も皆様に先見の加護が在りますよう。お気を付けてお帰り下さいませ」

と、カルタはもう一度深々と礼をしてから、静かに立ち上がり、部屋を後にする。

ほんの少し後、年齢を重ねたやや重い足音とともに、紅の間から都長が立ち去る姿が見えた。

毎朝の恒例行事である、先見の巫女姫の神託の光景。

巫女姫の神託は、国にとって無くてはならないものであった。人々は都長から日々伝えられる巫女姫の神託を聞き、それを糧に暮らしているのである。

年を重ねた年輩の民ほどその傾向は強く、しかしだからといって年若い者がそうでないかといえば、彼らもまた神託を敬い、巫女姫を敬っていた。

故に。

先見の力が開花しなかった巫女姫は、己の存在意義を見失ってしまった。

いくら見ようと、先のことは分からなかった。隣に座る己の片割れは、簡単に見えてしまうのに。七つの時に死別した母はどちらも分け隔てなく愛してくれた。だが、それでも成長するにつれて、心は枯れていく。

何故——妹<sup>あのこ</sup>に宿った力が、姉<sup>わたし</sup>に宿らなかったのだろう。

疑問は疑念となり、疑念は疑惑となった。ひょっとしたら、妹<sup>あのこ</sup>が姉<sup>わたし</sup>の力を奪った所為で、この身に宿るべき力が宿らなかったのでは

ないだろうか……？

妹<sup>あのこ</sup>が居る限り、姉<sup>わたし</sup>の存在意義など、無いに等しいのではないか……？

或る日、とうとう疑惑を猜疑心へと変えた巫女姫<sup>あね</sup>は、巫女姫<sup>いもうと</sup>を果の牢獄と呼ばれる場所に幽閉した。妹は、何の疑いも持たずに姉の手に引かれ、其処に閉じ込められた。

果の牢獄とは、一族に伝わる最も古い地下牢のことだった。今では誰も訪れることの無くなった、過去の遺産。遺産と呼ぶにはあまりにも暗いが、姉にとっては最高の遺産であり、贈り物であった。

『お前は、私の影。お前はこれからずっと此処に居るの。此処で毎日、私の為だけに言葉を紡ぎなさい。いいわね、……“ルカ”』

『……姉さま……それは、姉さまの、』

『いいわね、ルカ！』

逆らうことを許さなかった。屋敷に戻り、必死に二人の巫女姫を探していた屋敷の人間に、彼女は、“姉”は自ら果の牢獄に身を置いた、と答えた。力を持たぬことを恥じて、巫女姫として人々の前に姿を晒すことは出来ない、と。“妹”である自分に、どうか人々を導いて欲しい。どうか、もう“ルカ”は居ないものと思って欲しいと、懇願した、と。

涙を流しながら、どうか姉の意を汲んで欲しいと必死に訴える“カルタ”の姿は心打つ程美しく、誰もが彼女を疑わなかった。

見分けがつく筈がない、“カルタ”となった彼女は微笑む。案の定、誰にも詮索されることもなく、カルタはその地位を手に入れた。影となり、“ルカ”となった妹はその日から、姉の為に力を紡ぐ籠の鳥となった。

姉は力を求めていた。だが、その力は妹に宿った。

姉は妹であることを望んだ。妹は、姉となりその身を巫女姫<sup>カルタ</sup>に捧



げることを決めた。

＊ ＊ ＊

ぼんやりと天井を見つめながら、“ルカ”は“カルタ”の言葉を思い出していた。

理不尽ともいえる幽閉の真相。それを知る者は誰も居ない。此処へ来る屋敷の中の誰かは皆、自分を“ルカ”と信じて疑っていないのだ。力を持たぬが故に姿を隠した、巫女姫だと。

だが、何故甘んじて受け入れているのか、と聞かれたとしても、それは懺悔なのかもしれない、憐みだったのかもしれない。“ルカ”は今、その問いに答える術を持たない。

……けれど。

「ごめんなさい……姉さま——」

彼女の苦しみに気付いてやれなかった己が、罪深い存在なのだろう。力を持たぬ巫女ということがどれだけ彼女を絶望させたのだろう、と、想像しても、分かりはしない。だからこそ、気付いてやらなければならなかったのだ。

かつては心優しかった姉の、変化に。

——ならばこれは、やはり懺悔、なのだろう。

塞がれた世界の中で、ルカは一人思う。こうして生きることを選んだ、ただそれだけのこと。

不意に感じた気配に、ゆっくりと身体を起こす。一人の女性が静かに錠の掛った格子戸を開け、申し訳程度の食事を置いた。この場所に来る数少ない屋敷の人間の一人だが、ルカは名前も知らない。

再び格子戸に錠が掛けられ、あっという間に一人きりになる。特

に、寂しいとも感じない。

口に運んだ食事が、何時も通り重たく喉を通るだけだった。

## 壱（後書き）

此処から少しずつ色々展開していけばいいなあと……  
設定諸々の確認作業だけで半日以上を費やしたとか……。

## 式

小さな呼び声を聴いた。

聴こえた、気がしたただけなのかもしれないけれど。

——時間の感覚というものが、ルカには分からない。

毎日、一日中、仄かな光すら届かないような薄暗い場所に居る所  
為か、忘れてしまったのかもしれない。

此処に幽閉されて、どれ位の月日が流れたのか、知る由もなかった。

……カルタは。

今もきつと、巫女として屋敷の中をくると忙しく走り回っているのだろう。母もそうであったように、楼の国の先見の巫女としての仕事は、確か山ほどあった筈だ。

何を思うとも、ルカにとってそれは、手を伸ばしても届かない、  
光の中の生活でしかない。

「……あ……」

つ、と。

頭から身体を貫くように走る、不思議な感覚。ルカはその感覚の  
正体を、知っている。

先見の力。それが降りてくる、予兆だった。

伝えなければ。カルタに、伝えなければならぬ。ルカは横たえていた身体を起こし、格子戸を叩いた。

すう、と音もなく近づいてきたのは、この世界では多く使われている、式神と呼ばれるモノだ――殊更、楼の国と命の国ではこの式神が民の間にも浸透していて、その力を使えるものは多いとされている。

『ご要件を、ドウゾ』

抑揚の無い、無機質な声が響く。「お願い、カルタに取次いで」  
『お待ちくだサイマセ』

式神はあつという間に姿を消し――正確には目にも止まらない速度で地上へ飛んで行ったのだが、またあつという間に戻って来た。

『お言葉を、ドウゾ』

「屋敷の在るこの都に、何かが、来る。何かが来るの。民に害は与えない。けれど……」

けれど。その先の言葉を、ルカは伝えて良いものか、悩んだ。

先見の力は告げている。“何かが来る”、と。そしてその“何か”は、

「……カルタに、会いに、来る……だが、会いに来るだけ」

そう、告げているのだ。

「今日、ではない……明日の夕刻。それははっきりと、分かるんだけれど……」

曖昧で御免なさい……と、ルカは式神を送り出した。おそらくこのような言葉では、カルタは納得しないであろう。だが、民に危害を加えないということだけは分かっている。

それならば、警戒すべきはカルタの身の安全。だが不思議と、ルカは危険を感じていなかった。

傷付けに来るのではない、そう、純粹にただ「会いに来る」とい

う感覚だけが言葉のようにはっきりと伝わってくる。

何時もであれば、頭の中に、まるで自分がその場に居るかのよう  
な風景を見たりするのだが、それも無い。些か、先見と呼んでも良  
いのか分からないものではあったが、それ以外のなにものでもない  
ことも事実で。

式神が行ってしまった先を見つめながら、ルカは言いようのない  
困惑を覚えていた。

＊ ＊ ＊

楼の国には、こんな言い伝えがある。

『その力を持つ巫女は、国を動かし、人々を導くとされている。

その姿美しく、夜空を閉じ込めた藍の髪は静かに揺れ、  
月の光を閉じ込めた琥珀の瞳は、未来をも映すだろう』

これは、他の誰でもない“先見の巫女姫”のことであり、この言  
い伝えを知らぬ者は、この国の何処を探しても居ないだろう。

祖母から母へ、母から子へ、子から孫へ。

脈々と伝えられていく思想とも似たそれは、物心付くころにはす  
っかり心の奥に根を下ろしている。

巫女姫の姿は、毎朝神託を届けている長から、伝承通りの美しい  
姫君だ、と聞かされるのみ。

実際に見えることなど、平凡と暮らしている民は殆ど――否、ま  
ったく無いのである。

「はあ……やっぱり、憧れるよねえ」

「……………いい加減五月蠅いぞ、凜<sup>リン</sup>」

しっし。掌を乱暴に振って邪魔であることを指摘してやると、「うっわ、冷たい壱月<sup>イツキ</sup>兄」凜はじろりと睨み返して見せた。

生まれてからこのかた十六年。祖母に耳にタコが出来るほど巫女の言い伝えを聞かされてきた、と言っている凜は、毎度毎度この言い伝えを口にしては、机に肘をつきながらほう、と息をつく。

その姿は恋する乙女さながらなのだが、残念ながら彼女自身、ただの一度も恋というものに縁が無いらしい。以前指摘した時に烈火の如く怒り散らしたから、もう口にしなない方がいいのだろう。

楼の国、巫女姫が住まう屋敷が鎮座する都、銀<sup>しろがね</sup>の一角に佇む学び舎。その書庫に何時も通り本を読み漁りに来ただけだったのだが、先客に気が付かなかったのは些か不注意だった、と壱月は溜息をついた。

「毎度毎度会う人間にそれ言って回ってるのか？ お前は……」

「いやあ、おじい様の近くで言うのと、いくら言ってもお会いにはなれないぞ！ って言われるからさあ……」

ずるいよねえ、と頬を膨らませる凜に、

「仕方ないだろう、お前は孫娘であって長じゃない」

そう言い聞かせるのも、何度目になるだろうか。

凜の祖父は銀の都長で、毎朝巫女姫の神託を民に届ける役目を担っている。神託は都長を通じ、式神に託されて各地へ伝えられるのである。

身近に巫女姫の存在を幼い頃から感じていた凜にとって、彼女に会うことこそが今のところの人生の目標、らしい。

凜は幼馴染であり妹分でもあるが、どちらかと言えば一般民にである壱月にとってみれば、それは叶わない話である。だから、凜の夢のような話に付き合うよりも、本の虫になっている方がよほど為

になるし、楽しいと感じた。

結果――

「……で、用事は済んだな。じゃあ帰る。俺は忙しいんだ」

「え、何その脈絡のない区切り」

まだ話は終わってないのに！ と叫ぶ凜を背に。壱月は数冊の本を片手に椅子を引くと、スタスタとその場を後にした。

だいぶ草臥れた書庫の戸を開けると、壱月自身が埃臭さを纏っていることに気が付いた。途端、眉間に皺が寄る。

古いだけあって歴史的書物があることは評価出来るのだが、この匂いだけは毎度だけじゃない。

やれやれ、と首を軽く回してから、家に向けて足を進めた。

……今日もまた、凜のあの話を聞いてしまった。それこそ、此方にも耳にタコが出来てしまいかねない。よく飽きもせずああしているな、と関心すらしてしまう。

慣れた道の角を曲がって、駆け足で通り過ぎていく子供たちを視界の隅に見た。すれ違う際に、巫女姫様ごっこ、という単語が聞こえた。

右を見ても左を見ても、巫女姫の話題が尽きることはない都。それが悪いことだとは思わないが、壱月はおそらく、皆ほど巫女姫に熱心に信仰を注ぐことは出来ていないだろう。

各国に祀られている、それぞれの巫女。どの国の巫女も摩訶不思議な力を持ち、常人とは違うそれで国家を支えている。

たった一人の力が、その土地に住まうすべての人の希望となり、光となるのだという。

――それは即ち、そのたった一人の存在が崩れてしまえば、国は駄目になってしまうということ。



「頼りきりっていうのが……どうもな」

ぽつりと呟いた言葉は誰に対するものでもない。だが、いくら“崩壊の刻”というあるかもわからない理から人々の心を救う為とはいえ、たった一人にその重荷を背負わせるのが気に入らないと言えど、気に入らない。本人たちが、重荷と思っているにせよ、しないにせよ、だ。

……気に入らないからと言って、何が出来るわけでもないのだけれど。

「……？」

ふいに、慣れない気配を感じ、壱月は顔を向けた。目に映るのは見慣れた何時も通りの都の風景。行き交う人々も、馬車も、何ら変わった様子はない。

気のせいだろうか。数回辺りを見回してみたが、やはり何も感じ取ることが出来ない。

一瞬張ってしまった気を散らすように軽く首を振って、壱月は帰路を進んだ。

＊ ＊ ＊

会いに来る。ただそれだけだと、ルカは言っているらしい。

カルタは自室でルカより飛ばされて来た式から、なんとも不可解な“先見”結果を聞いた。

都に、ルカもよく見えない何かが来る、という漠然とした言葉。今まで、ルカの先見がそんな曖昧な状況を見ることは無かった。

明日地震が来るから何処の地域の民を何処へ逃がせとか、天候が

荒れるから対策をしなければその先数年何処の村が飢餓に苦しむことになるのか――これはほんの一部にすぎないが――的確なものが殆どだった。

それなのに、今回は“何か”が来る、しかも、カルタに“会いに来る”だけなのだという。

「……私に、会いに……」

考えられるのは、先見の巫女姫の力を求めて何処から来る者くらいだが、そうとなると少々厄介なことになる。先見の力はルカにしか使えない。カルタは、突然の来訪者に対して先見が出来るわけではないのだ。

そもそも先見の力は、楼の国の役人の方針だとかで、神託という形で民に知らせることはあっても、個人的に先見をすることは無い。誰か一人が巫女姫を抱え込み、大きな力を得て悪用することが無いようにという、これはカルタの母、祖母、更にはその前の代から続く決まり事であった。

ならば、いくら会いに来たとしても、先見の力をその相手に見せる必要は無いだろう。屋敷の人間が許す筈もない。

カルタは机の上の湯呑を手に取り、中身を口に含む。喉を通るまでにふわりと薫る桃の香りに、そういえばこれが桃の茶葉から入れた茶だということを感じ出した。

「カルタ様」

一声に、びくり、と肩を揺らす。「如何ですか？　お口に合いますでしょうか」

「……ええ……とても美味しいわ、有難う。入っても、大丈夫よ」

「失礼致します」

侍女がにこりと微笑みながら戸を開けた。手には茶器を乗せた盆を持っている。手にしていた湯呑を彼女が取り易い場所に置くと、有難う御座います、と頭を下げる。

「本日も良いお天気ですね」

「そうね。その所為で酷く冷えている気もするけれど」

「左様で御座いますね。寒さばかりは火鉢があっても辛いですわ」  
何気ない会話。カルタは気付かれないように息をつく。早く、部屋を出て行ってくれればいいのに。

屋敷の中の人間は、誰もがカルタに対して親しみと敬意を込めて接してくる。それが嫌というわけではないのだが、些か肩が凝ることも事実だった。

昔は、そうではなかった筈だった。少なくとも、あの日までは。あの日から、すべての生活が一変したのだから仕方がない。それも、自分が望んだ道なのだ。

実の妹を、踏み台にし、利用しようとも構わない。何の罪悪感すら、感じていないのだ。

——だってあの子は、私からすべてを奪った元凶なのだから。

何を今更、迷う必要があるのだろうか。何が来ても、この秘密に気が付く者など、居る筈が無いのだ。

カルタは、再び注がれた湯呑の中身を見て、有難う、と柔らかく笑った。

その笑みは、とてもとても美しい、無邪気な少女のようだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1770q/>

---

カガミノクニ

2011年1月19日12時43分発行